

サクラマス 日本系

Masu salmon *Oncorhynchus masou masou*



管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)、日口漁業合同委員会、漁業道県

生物学的特性

- 最大体長・体重：体サイズは個体群間変異が顕著。最大値の範囲は尾叉長 40~80 cm、体重 0.5~8 kg 程度
- 寿命・性成熟年齢：降海型個体は3歳（まれに4歳）で産卵し、その後死亡する
- 産卵期・産卵場：産卵は分布域北部から始まり、7月から11月の間に1か月弱、河川中~上流域
- 索餌期・索餌場：河川・海洋とも周年であるが、季節変動は大きい（ただし、産卵遡上後は索餌しない）。
- 食性：河川では、水生、陸生の無脊椎動物、稀に魚類。海洋では魚類や大型のプランクトン。
- 捕食者：河川では魚類、鳥類、遡上親魚は中型哺乳類。海洋については詳細不明。

利用・用途

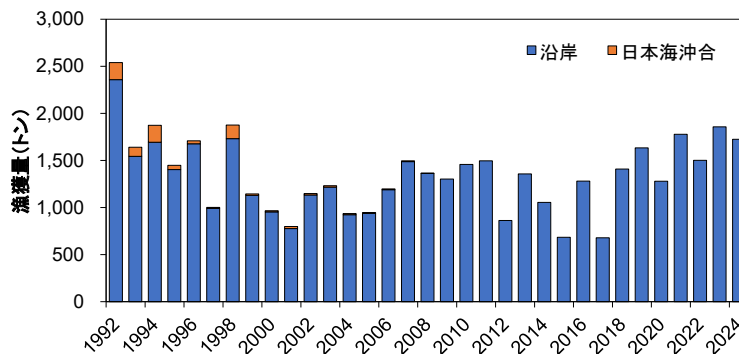
生鮮での流通が中心である。主に、ルイベや塩焼き、フライ、ムニエル等にして賞味される。魚卵の利用は、ほとんど見られない。富山県のます寿司の原料としても有名。

漁業の特徴

主に日本とロシアの沿岸で漁獲されている。ただし、ロシアでは、サクラマスを対象とした商業漁獲は行われておらず、主な漁獲は沿海地方やサハリン州での混獲である。漁獲のほとんどは日本であり、沿岸域での定置網やます曳釣り、一本釣り、刺網等の様々な漁法が用いられる。また、本州日本海側の河川では主に遊漁対象として漁業権魚種に指定されている河川も多い。

漁獲の動向

最も顕著な減少を示しているのは富山県で1980年代半ばには20トンを超える漁獲があったが、2006年以降の漁獲量は5トンに満たない。ついで、新潟県も、2011年を最後に、20トンを超える漁獲量は記録されておらず、減少が著しい。また、青森県も富山県や新潟県ほど顕著ではないが減少傾向を示しており、1990年代前半まではほぼ毎年300トンを超える漁獲があったが、2000年以降は年変動が大きくなり、65~380トンの間を推移している。さらに、秋田県は2022年、山形県は2020年に1998年以降で最低の漁獲量となり、いずれの県も直近5か年では最低水準の漁獲量が目立っている。岩手県では、2023年までの5年間では、1990~2000年代と同程度の漁獲量を記録している年も多かったが、2024年は大きく減少した。一方、北海道に関しては、2021年以降は1,000トンを超える漁獲量が続き増加傾向である。



日本の沿岸と日本海沖合におけるサクラマスの漁獲量の推移 (1992年~2024年)

資源状態

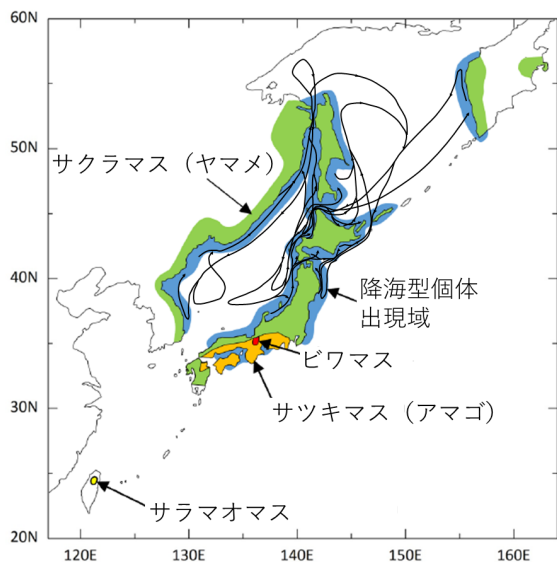
1970～1980年代と比べると漁獲量は全体的には減少しているが、年変動も大きく、2004年から2023年にかけては国内の沿岸漁獲量には極端な減少はみられない（平均約1,277トン：678～1,857トン）。2024年の沿岸漁獲量（約1,725トン）もこの範囲内であるため、資源水準は中位と判断した。また、2018年以降の沿岸漁獲量は1,500トン前後で推移しているため、資源動向は横ばいと判断した。ふ化放流事業による資源増殖の効果は懐疑的という見解もある一方、近年、河川分断化解消等の影響もあって、新たな産卵河川、個体群定着河川が確認されている。自然再生産による資源増加が期待され、今後の資源動向を注視する必要がある。

管理方策

道県の漁業調整規則等による遊漁の制限ならびに地方自治体等の策定した増殖計画に基づいた種苗放流等が行われている。しかし種苗放流については効果が十分に得られていないだけでなく、近年の研究から、放流魚は野生魚を競争排除すること、放流による密度増加はサクラマス幼魚の成長率低下を招き、結果として将来的な漁獲対象であるスマルト（河川生活期の後に降海する個体）の出現率が低下することが分かってきた。北海道における調査では、漁獲されるサクラマスのうち70～80%は野生魚であったこと、河川分断化解消等により産卵河川が増加していることも報告されている。これらを踏まえると、サクラマスについては自然再生産に重点を置いた資源管理を検討する必要がある。

サクラマス（日本系）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 （最近5年間）	1,280～1,873 トン 最近（2024）年：1,750 トン 平均：1,645 トン（2020～2024年）*
我が国の漁獲量 （最近5年間）	1,279～1,857 トン 最近（2024）年：1,725 トン 平均：1,628 トン（2020～2024年）
資源評価の方法	沿岸漁獲量の推移による水準と動向の評価
資源の状態 （資源評価結果）	2024年の漁獲量（約1,725トン）は過去20年間の変動範囲内（678～1,857トン）であったため資源水準は中位と判断 過去5年間の漁獲量は1,500トン前後で推移しているため資源動向は横ばいと判断
管理目標	国全体としての資源管理上の目標値等は未設定 目標とする放流数は、地方自治体等が策定している
管理措置	0+春・秋、スマルト放流数計7,084千尾（2024年度） 地方自治体等の策定する増殖計画 道県の漁業調整規則等による遊漁の制限 （体長・持ち帰り数の制限、禁漁期の設定） EEZ外禁漁
管理機関・関係機関	NPAFC、日ロ漁業合同委員会、漁業道県
最新の資源評価年	なし
次回の資源評価年	未定

* 日本とロシアの漁獲量合計。



サクラマス（ヤマメ）（緑）、サツキマス（アマゴ）（橙）、ビワマス（赤）、サラマオマス（黄）の自然分布域及びサクラマスの回遊ルート（黒線）
海上の青い範囲は、降海型個体（サツキマスも含む）出現域を示す。